

夜間の安心を福島から発信したい

NPO法人 ILセンター福島 ナイトヘルプステーション



看板



基地である「ソレイユ」の外観



↑ 出勤風景。車の名前は、その名もナイト号



← 事務所内の光景



102号室。現在は自立生活体験室に使用

私たちNPO法人 ILセンター福島で5年前から準備してきたナイトヘルプステーションが09年4月にスタートしてから、3ヶ月が過ぎました。まず“ナイトヘルプステーション”とは、一言でいうと、夜間、電話一本で、ヘルパーが駆けつける介護事業所です。22:00から翌朝8:00までの営業で電話を頂くとオペレーターが対応し、必要に応じて介助に入ることになります。原則連絡から30分以内の到着になります。

これに定期的な介助を組み合わせた事業がナイトヘルプサービス事業所です。

4名のスタッフで1日2名(男女1名ずつ)で業務する全員ヘルパーです。将来的には看護師も入れ介護保険の夜間対応を取り入れる計画もあります。現在、利用登録数20名で、筋ジストロフィー、進行性骨化性筋

炎、パーキンソン病、血友病の方がいらっしゃいます。

障害福祉サービスでは夜間に特化した制度はありません。現在、在宅で暮らす障がい者(福島県では障害者の害の字は平仮名明記になっています)の夜間の介助保障に関しては、家族または各事業所が無理をしながら努力をするか、本人が我慢せざるをえない状況にあります。

自立への意識が高い地域だから

私たちの暮らす福島県福島市は昔から障がい者の自立への意識が高く、在宅での介護保障がほとんどなかった時代から、複数の障がい者がボランティアを直接呼びかけて親元や施設から離れて地域の中で暮らしていました。

その中で私たちILセンター福島が96年4月にオープンし障がい者の

権利擁護、介助保障の確立などを中心に活動を行ってきました。障がい者が運営に直接参画することで、障がい者の声が私たちの活動の基礎となっていきました。

地域の中で暮らす障がい者が徐々に増えていきました。それでも、障がい者が地域生活をおくるためには住居、収入、職業選択、偏見など困難なことがたくさんありました。夜間の介助保障に関しても同じように困難な状況のひとつでありました。

私たちが夜間の介助保障に関して本格的に取り組みだしたのは04年の4月からで、ケア付き住宅、自立生活体験室、そして夜間の介助(ナイトヘルプサービス)という住居の問題、地域生活移行の問題とともに三本をまとめた形でのナイトケアステーション構想を打ち立て、福島市で暮らす障がい者と福島市内にある



検討会



原則、福祉用具等は利用者の方に用意していただくことになっていますが、ソレイユにはユニバーサル仕様の風呂とトイレがありそれを入居者の方が共用で利用できるようになっている。



札幌で佐藤きみよさんからノウハウを伝授される



筋ジストロフィーの八代 弘さん

障害福祉サービス関係の事業所に呼びかけ、ナイトケアステーション構想検討会を発足しました。

この検討会は1年間全4回行い、私たちが手がける事業としての基盤ができたのです。

1年間の検討会終了後、ナイトケアステーション構想の中から住宅問題に焦点をあてた障がい者の地域生活ニーズに対応する住居の確保に関する研究会を06年4月に発足し、こちらも1年間全12回開催いたしました。この研究会の研究結果をシンポジウム形式で障がい者の住宅問題をどのように解決していくべきか発表し、このシンポジウムに参加していただいた聴衆の方の一人から大きく賛同していただいたことが、現在のナイトヘルプステーション実現のきっかけとなりました。

自立できるアパートの確保

この研究会の研究結果を簡単に説明すると、ユニバーサルデザインの住宅を建ててくれる民間のオーナーを募り、その住宅を障害福祉サービス等事業所が一括で借り上げ、運営することで障がい者でも安心して入居できるアパートにするという内容で、シンポジウムに参加いただいた方で、その住宅のオーナーになっていただける方が現れたのです。

そして、翌年4月からそのオーナーと設計士と私たちでその住宅、ILホーム ソレイユ小倉寺という名前で09年4月にオープンさせることで話が進み、ILホームプロジェクトと名づけたプロジェクトチームをつくりました。現在、障がい者の方は5名、また、高齢者の方が2世帯入居しております。また、1室は自立

生活体験室としてあり今後地域移行したいと思っている方などが利用されております。そして、このソレイユ小倉寺の1部屋を借りて、同じく09年4月にナイトヘルプステーションをオープンすることも決まったのです。

ナイトヘルプステーションの準備に入った私たちですが、ナイトケアステーション構想検討会の中で、事業の基盤はある程度みえていたものの、ほとんど例の無い事業所をオープンするにあたって解決すべき課題はたくさんありました。

現行の障害福祉サービスをどのように活用の仕方や、採算性、勤務体制、利用ニーズ、そして一番の課題はどういった方に、どのように利用していただくのかということでした。頭を悩ましていたときにILセンターの会員で人工呼吸器を利用して

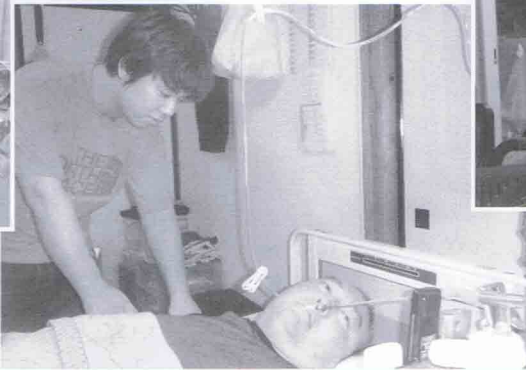


深夜の車いすへの移乗中

ソレイユで1人暮らしをしている進行性骨化性筋炎の女性



深夜1:00人工呼吸器の調整と体位変換



利用者であり良きアドバイザーである
八代宅での介助

23:00~5:00、4回介助を
行っている

いる八代 弘さん(本誌7月号参照)から、呼吸器を利用している方などは、夜間の介助がとても重要であることをうかがい、さらに詳しい話をうかがえるところまで紹介いただきました。そこで研修という形で札幌に行くことになりました。

札幌にはベンチレーター使用者ネットワークという呼吸器を利用している方のための情報提供などを行っている事業所であり、私たちと同じILセンターである自立生活センターさっぽろさんにまず伺い、理事長の佐藤さんと事務局長の岡本さんにお話をうかがうことができました。

三つの重要ポイント

その中で重要なポイントが三つ浮かび上がりました。

(1) 本質的には日中の介助と変わらないこと、夜間であっても生活し

ていれば当たり前起こることを解決していきたい。

(2) 30分原則ができたこと、1分1秒を争うような事態には対応できないこと、あくまで救命ではなく介助を行う事業所であること。

(3) 自分らしい生活を支える大事な仕事であること。

以上の3つのポイントを事業としてだけではなく大事にしていかなければならないことがわかりました。採算についてですが、現在のところ1晩の利用件数10件がなんとかぎりぎり採算ラインです。この数字はスタッフの人数によって変わってくるのですが、今後は1晩15~20件ぐらいで落ち着くと考えています。

その後3ヶ所の介護保険の夜間対応型訪問介護事業所にかがいが、こちらでは運営やスタッフの体制に関して興味深い話を聞くことができま

した。この研修をとおしてナイトヘルプステーションの担うべき役目、事業の姿を見出すことができ、また、このときまで事業所の名称がナイトケアステーションでしたが、“ケア”よりも、“ヘルプ”であることを重視するため現在の名称になりました。

このような経緯で無事09年4月1日にスタートを切ったナイトヘルプステーションですが、まだ試行錯誤の続く状態です。ですが、利用者さんの「ナイトがあるおかげで助かっています」や「ずっと必要だと思っていたのが利用できるようになりました」などたくさん声を聞くたびに、はじめることができて本当によかったと思う日々です。

今後は事業モデルとして確立し、全国に普及する事業にしていきたいと考えています。

【笹木 大輔・記】